



北海道国語教育個体史の研究（II）：坂本亮の場合

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡屋, 昭雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00003290

北海道国語教育個体史の研究 II

——坂本亮の場合——

岡屋 昭雄

一 はじめに

坂本亮は、一九八二年十一月二日、三日、四日、九日、十日、十一日の合計六回にわたり、朝日新聞北海道版に「『北』の語りべ」として登場し、概略次のような自己の精神史について証言する。

おやじが函館・湯川村の村長で、当時、二級村は支庁長の任命でした。その支庁長が釧路・厚岸町長になると、迎えられて助役に、おやじについて転々と渡り歩いたもんです。昭和二年、札幌師範（現在の北海道教育大学札幌分校）を卒業し、最初の任地が厚岸小学校に、その後釧路市内に転じ、そのまま教壇生活を続けるはずでした。それが降ってわいたような「つづり方教育」をめぐる『赤い教師』摘発に巻き込まれ、私の人生は急転。

思い出しても不愉快というか、あきれたというか。しかし、もう古いことだとか、事件の性質から当時、新聞への掲載が禁止されたこともあって、世間が知らなければそれでよいとか、関係者

は口を閉じたまま。ああいう過ちを二度と繰り返さないためにも、そのような世の中に再び戻らせないためにも、機会あるごとに語り、書き続けていこうと思っています。

あれは昭和十五年十一月二十一日、小雨が降ったりやんだりの寒い朝。起きがけを特高刑事に踏み込まれた。留置場に入れられ、いろいろ聞かれるが、初めは何のことかわからない。そのうちつづり方の教師仲間のこと、証人尋問されているのかと。自分が事件の首謀者だなど、思いもよらないことだ。

以上、坂本亮氏の証言からもわかるように、所謂、治安維持法によつて検挙された、つまり綴方の指導を通して、子どもたちに赤い思想を吹きこみ、あるいは、将来プロレタリア思想を持った人間を育てようとしたとして摘発されたのであった。

昭和十五年十一月にひき続いて、翌年昭和十六年の一月にも、さらに道内各地の真面目な綴方教師五十数名が一斉に検挙された。そして、多数の警察官に囲まれての暴行に、心ならずも自白した教師もいた。その結果十二名の教師（坂本亮、小坂佐久馬、中井貴代之、

土橋明次、大森尚、小笠原文次郎、小鮎寛、長谷川良精、横山真、清川清一、中山亀太郎、小田中一治)が釧路検事局に送件されたのである。

以上の坂本氏の証言からもわかる如く、あの忌わしい戦時下の犠牲者が、北海道の綴方教育に熱心な人だったのである。

さて、綴方実践者として、坂本亮を見ていく時に、三つの側面から光が当てられるということは贅言を要しないであろう。

まず一番目に、教室文集「ひなた」の実践者として全国的にも著名であったことである。雑誌「工程」(七月特輯 文集再版号昭和十一年七月一日発行 椎の木社)に、国分一太郎の文集「もんべの弟」(山形県長瀬小学校尋四教室)、鈴木道太編輯の文集「手旗」(宮城県亘理郡吉田校高二男)、坂本亮人指導の子供の作る文集「ひなた」(釧路市旭小学校尋五男女級 日向の教室)、以上三つの文集が紹介されている。とりわけ坂本亮人指導の文集「ひなた」について百田宗治氏は次のように、文集の特色・内実について激賞する。

坂本亮人君の「ひなた」が前々号の経営特輯其他で先進峯地氏によって折紙を付けられ、かつ文集経営上の教室組織に於て全国に冠たる位置を占めつゝ、あることも周知のこと、信ずる。¹⁾

妹尾輝雄も、千葉春雄編集の雑誌「教育・国語」(昭和十四年十二月一日発行 特輯 学級文化の交流 十二月号 厚生閣発行)に、坂本亮人の文集実践について次のように学級文化昂揚の機能を高く評価して紹介する。

百田宗治氏の編著された「綴方読本」を見ると「出版部の仕事」と題して、北海道の坂本磯穂氏の実践が児童の綴方によって報告されてゐるが、こゝでは、書物に関する知識、出版に関する知識が、実際のな技術として習得され、一つの組織として生かされて

いるのを見るのである。学級文化昂揚のために努力され、工夫されなければならぬ重大なポイントが、ここに蔵されてゐるのである。²⁾

また、坂本が尊敬し、多くのことを学んだ野村芳兵衛が編集する雑誌「生活学校」、その「生活学校」(昭和十一年二月号)に「子供達自身に文集を作らせてゐる者では、坂本亮人君(釧路)の指導は優れてゐる。」³⁾と。野村は坂本の文集を評価している。

以上、百田、妹尾、野村三氏が坂本の指導した文集「ひなた」を、学級文化活動の一つの成果として位置づけ、子どもたち自身が文集づくりの計画、印刷、製本までをしているところに特色があると評価するのである。

二番目に、坂本は、北海道綴方教育連盟の中心的な役割を果たす。そして、そのために、北海道綴方教育連盟事件に遭遇し、人生の転換を余儀なくされる。

三つ目に、生活教育についての留岡清男との論争、その他道内の国語教育の活動、文化活動があげられると思う。以下、三つの側面に即して坂本の綴方教育実践の内実を中心にして詳細に論及したい。

二、子どもの作る文集「ひなた」を中心に

坂本が書いた論文は実に多い。小鮎寛の編集していた「北見文選」、石附忠平の編集になる「北海道教育評論」、「北海道教育」、全国的規模の雑誌「生活学校」百田宗治の「工程・綴方学校」、「綴方生活」、千葉春雄編集の「教育・国語」、岩波の「教育」等に数多くの実践記録、論文を発表する。

「教育・国語」昭和十四年八月号は「全日本国語人誌上コンクール」を特輯する。北海道では、坂本磯穂が編輯して、土橋明次が「学級文化の交流」、小鮎寛が「教師と教育政策」、中井喜代之が「教師と読書―私信風に―」、小笠原文次郎が「教師と経済生活」、高島幸次が「教師と組織」、坂本磯穂が「教師と技術」を執筆する。

そして、全国綴方実践人の葉書による投票によってコンクールが行われた。その結果、坂本の論文が二六一票で関東の佐藤茂と同数の最高点、奨学金十五円を受ける。

次点者五人のうち、北海道からは、小鮎寛、小笠原文次郎が入る。千葉春雄が、東京高等師範学校附属小学校の訓導をやめて、自ら、厚生閣という出版社をつくり、全国の若手の国語教育実践者、とりわけ綴方実践者の育成に心を砕くようになる。その具体的な仕事は、雑誌に若手の原稿を求めて掲載して実践を紹介し、その実践交流を通して、実践地盤に厚みをつけることであり、他のひとつは、若手実践者の著書を出版して、世に紹介するということであった。そのため、千葉は全国の若手の国語実践者と交流する。ちなみに北海道へは、昭和十一年に訪れ坂本の実践の非凡なることを認めたことは言を俟たない。

以上の二つの事業にあわせて、全国的に優秀な実践者を表彰することがあった。その中に、坂本は入ったのである。全国的な実践レベルのふるいにかけて、卓抜なる実践者として表彰されたのであるから、坂本の実践が充実期に入っていたことを如実に物語る。北海道性を追求するために生活教育を中心に据え、子どもたち自らが、生活者としての自覚に立ちつつ、自己の生活意志、意欲を鮮明に綴方に表現する。そして、外的環境である、自然・人間・社会に働きかけ、自己の生きる生活を太らせていくという文集活動は、学

級文化という確かな基盤と、豊かに人間相互のかかり合い、育てあいによって成長し続ける。だからこそ、文集の編集、ガリ切り、印刷、製本までを子どもたちの手でさせたのである。つまり文集工場なのである。したがって、子どもたち自らが、自らを学習主体者として認識し、実践行動を通して、自己確認をし、さらに高い自己創造のために挑戦するという確かな綴方実践営為がなされるのである。だからこそ、多くの北海道の綴方実践には、子どもたちをまき込んだ文集づくりが確かに、豊かに息づくようになるのである。

坂本が、昭和十四年の「教育・国語」八月号に書いた「教師と技術」の概要は次の通りである。

「軍需景気による教員心底の現実を直視すると、教員の給与が安いということもあるが、教師の教える技術が正当に評価されていないことにつき当たる。」そして、次のように述べるのである。「教育といふ仕事の一つの技術として社会的に認識され定位されてゐない点に存する。今の父兄の何人が先生に自分の子供を托して、先生でなければ教育出来ないものを期待してゐるであらうか。なかにわしに仕事があれば先生のやる躰くらゐは躰られるし、読書でも算術で教へてやれるくらゐに思つてはいはしまいか、どんな人間だつて曲りなりに教育的意見は持つてゐるものである。」そして、教育者が観念論的教育学の世界にとじこめることなく、「教育という仕事を社会的な一つの技術として確立しさせてほしい。」と結ぶ。坂本が一番主張したかったのは、教育という仕事は、すぐれて生産的な技術ではないが、教員には誰れでもなれるものではない。いやむしろ、生産的な技術の根基にある人間形成の技術をこそ大切に考へる風潮をつくり出すことが喫緊となると提言する。坂本のこの提言は、今も決して古びていない。それどころか、今もお新鮮に人の胸をうつ

ものがある。

また、「教育・国語」（昭和十四年十二月号）に坂本は、「明日の建設——学級文化交流の昨日と明日——」という論文を書く。本人の回想によると、「全国の読者にも評判がよく、自分も自信を持って書いた。」という。そして、そのことは、自己の綴方教育実践の充実を背景にして文章を書きつつも、その一方で学級文化創造の到達を示す高さを抱持しているのである。しかも、昭和九年頃からの苦しい実践を閲して得た結実を示したものである。坂本の文集は、子どもの手づくりであり、子どもの確信と世界観を示すものである。そこで、坂本は学級文化交流に果たす文集のあり方について次のように述べる。

僕は先づこの新しい文集は、子供の文化読本としての要素を持たねばならぬと考へる。子供の生活組織に役立つやうな童話、例へば榎本楠郎氏や川崎大治氏の作品や、子供の科学読物や、季節の折々の行事の解説や、事務局の問題の説明や、又どのやうな教科の教科書にも載つてゐないで、しかも子供の身辺に役立つやうな最小量の知識、例へば近藤益雄君がやつてゐたローマ字の指導などを、系統的に多面的に与へてやりたいと考へる。又子供が教室や学校でやる児童劇の脚本なども載せてやりたいし、宮沢賢治の「アメニモマケズ」のやうな詩も載せてやりたい。高学年でも、家に帰つてから小さい弟妹に読んで聞かすことの出来るやうな童話や童謡もひとつくらゐあるのもいゝし、又母のページなどあつて、教室の学習や子供の躰方などが、巻末に附録的に印刷されてゐるのはいい。この家庭との連絡を文集面で果してゐることで感心したのは、平野婦美子さんの仕事であつた。

僕自身の反省をいふならば、以前の『ひなた』の文集指導時代、

月刊文集集「ひなた」とは別に、月々二三冊平均の童話集や児童劇の脚本集や、科学読物などを編輯したが、これらを集めれば、卒業する子供たちは約二千ページに余る綴込みの印刷物を記念に持つたことになる。これらを個々とはせずに、総合的に立体的に編集したならば、『ひなた』はもっと奥行のあるものになつたに違ひない。

次にこの生活文集では、子供に与へる以上のものの外に、教師相互の文化交流のために種々な実践記録を添えて行きたい。一般に生活教育の主張者たちは僕たちの日々の授業、僕たちが学校で最も力を注ぎ又注がねばならぬ教科そのもののいろいろな指導文化を看過する嫌ひがある。少くともその理論的採用にあつてはどれほど親切には問題にしてゐないのであるが、これらの問題について実践の報告をし意見を發表するといふ態度が望ましい。

例へば理科の指導に當つて、時局的意味から、どのやうな教材に対してどのやうな重みをつけるか。あるいは政治史にあまりに主力が注がれ過ぎてゐて、吾々の身辺の事物の歴史——具体的に云ふならば、日本人の衣食住の歴史などについては、ほとんど何も教へることのない現在の国史の教授に於て、さういふ方面を調査し開拓し得た実践報告などをせひのせて行きたいと思う。又、その文集経営の母胎である教室経営についての具体的報告などは、学級文化交流のために欠くことの出来ぬ部分であると思はれる。（以下略）

以上の坂本の提言からもわかる如く、文集活動がただ教師の趣味や、作文集のみに終わることなく、文集が教育の中心に位置づけられ、児童文化活動の出発点であり、その過程であり、その到達を示すものであるとする。だからこそ、子ども、教師、父兄への働きか

けになり、かつ地域社会の人々、他の教師への働きかけの有効な媒介となり得るのである。そのためにこそ、教師の指導文化、すべての児童の文化活動を統合するものとして文集を位置づけるのである。

したがって狭い意味の文集づくりの枠組みにとらわれることなく、児童文化創造に基盤を据えた教育活動に文集活動を高めることができたのである。そして、そのことが、野村芳兵衛の生活教育から学んだこと、かつまた、「生活科学研究会」から学んだことを坂本なりに止揚統一しつつも、自分の教える子どもたちを見据えての実践理論に高めたところに意味があるのである。そして、そのことが、今日の文集活動においても、この実践理論を超えることができないことを見ても坂本の学級文化に対する実践理論が卓抜なるものであることはわかるであろう。

さて、ここで、鳥取県の綴方実践者であり、当時の綴方実践界のリーダーでもあった峰地光重が昭和十年釧路市旭小学校の坂本学級を訪問し、子どもが集った文集としては日本一だと評価する。そして、その文集工場というべきものを「ひなた」学級では「仕事の歯車」と名づけた。その仕事の内実は、編輯、孔版、表紙、カット、インキ、ローラ、用紙、製本の八つの部門にわけられている。そして、出版部の仕事について、文集「ひなた」に次のように紹介する。

子供印刷工場では、文集、詩集、童話集、学芸会のプログラム、文集用原稿用紙などをみんな騰写版で印刷します。又原紙を切る人もあります。これを孔版係といひます。それから、切った原紙を直す係もあります。これを批正係といひます。批正してからローラにかける、これがローラ係です、その時用紙をよこしたりとつたりする、これが用紙係です。又インキがたれなくなるとインキ

を出す係もあります。これをインキ係といひます。すつてから半分折る。折つてから製本にかゝります。(以下略)

昭和十一年雑誌「工程」(文集再版号)七月号に、文集「ひなた」について坂本は、次のように解説する。

昭和九年七月「私たち子供で作る文集ひなた」の最初の号を発行した。当時教室の子供らは前学年から持ち上つてきた尋常四年の男女、やうやくあどけなさから離れて潑刺と動き出す頃であった。出来上つたのは終業式の日で、この日僕は教室の大部分の子供らと、市から少し離れた田舎の小学校を借りてする夏期聚落に出かけることになつてゐた。(以下略)

以上のことからわかるように、文集「ひなた」の実践が昭和九年七月からであることを明示する。また、文集内容については次のように述べる。

正確に算へると四年時代の文集は五冊、詩集が三冊、五年になつて文集は十冊、詩集は六冊である。外に純粹の文集とはいへぬが、「遊びの研究」春夏秋冬四冊、「漁業の研究」二冊がある。月刊であり全部児童の手でなる性質上各号とも三十五頁内外のものである。

『ひなた』の仕事は又評価は勿論その作品内容に与へられるものであるが、僕はそれと同時にこの文集の製作過程、学級に於ける仕事と文化に対する協働性も見逃して貰ふたくなかと思つてゐる。(傍点筆者)

もとより、生活教育の思想、とりわけ自己および、自分たちの家の仕事にかかわり、さらに地域の産業に子どもたちをかかわらせながら書かせ、それを素材にして自分たちのよつて立つ立場を明確にさせることに努力を傾注する。つまり生産教育、消費者教育を綴方

にとり込んでいた。だからこそ、「家の生活を考える」という単元が組まれ、「漁業の研究」という、釧路の産業にかかわった調べる綴方に挑戦するのである。それ故に、現実生きていく子どもたちが、中村雄二郎のいう共通感覚論に基盤を握えつつも、自分が生きていくという実感を大切にするという身体論の世界にまで入りこんだ綴方実践をするのである。

ところで、文集「ひなた」の内容に立ち入って詳細に述べてみたい。そして、その文集「ひなた」は、坂本氏が現在も大切にしているものである。製本されたその文集は、戦後、北海教育評論社で、火災に遭いながらも生き長らえたものである。だからこそ、愛着があるということもあるが、その一方に、坂本の綴方教育実践の母胎をなすものをして大切にしているのである。と同時に、毎年のように文集「ひなた」の同窓会が今もなお続いていることも注目したい。すなわち坂本の綴方実践は、一人の作文コンクール選手を作ることではなく、一人ひとりの生命にかかわりながら、一人ひとりに生きる力をつけ、人間として生かしていくことに主眼が注がれる。だからこそ、書き手である子どもたちは、ひたすら自己の内部に向かって掘り進めていくのである。

「ひなた10」の目次は「家の生活を考える」「生活のスナップ」「近所の家」「家の歴史」「愛情の綴方」の五つに分類されている。

「詩集ひなた6」の目次は、「仕事がバックにある詩」「家の人達の仕事の詩」「自分で働らいた詩」「坂本先生」の四つに分類される。もうこの時は坂本はこの学校を去るのであるが、子どもたちの文集づくりはその後も続く。坂本が撤いた綴方の種に「詩も文もうまくならなくてもよい、生活がしっかりと深められればいいのだ。」と「綴方はしんじつ、このころを育てるために勉強するのだ。」ということとは

確実に子どもたちの心に根を下ろし確かに成長・発展していくのである。ここにこそ、坂本の綴方実践の本領が存在する。三年間、すなわち三、四、五年の担任であった坂本の仕事は何であったか。それは、ひたすらに、子どもの生命にかかわりながら、子どもの生きる空間を発見することに腐心する。文集交換を全国的レベルに於いて実施する。そして、子どもたちの参考になる詩・作文を全国の文集から引用して紹介する。そして、当時の有名な童話も文集に掲載する。小川未明の「月夜と眼鏡」、浜田広介の「黒い樵と白い樵」、「愛の学校」の「プレコシ」、ドイツ童話「法螺男爵の旅」、新美南吉の「ごん狐」等の作品文集も出される。さらに、「ひなたカルタ」、学芸会の案内状などといった方面にまで多彩に拡がるのである。そして、このことは、子どもたちが、自己の文化を開拓する筋道と相即するのである。つまり、子どもたちが自己の生活を凝視し、生活を開拓し、発展させることに専念するのである。

したがって、坂本が大正十年に出版された田上新吉の『生命の綴方教授』（自黒書店）から発見した表現指導と生活指導の統一的把握、さらには野村芳兵衛の「生活学校」からも多くのことを学ぶ。そして「教育科学研究会」からも多くのものを学ぶ勉強家でもあった。

しかし、だからといって、決して坂本は生活という抽象的概念にふりまわされることなく、あくまでも目の前にいる子どもたちの生活を高めることに努力を傾注するのである。そこが、東北地方の綴方教師たちと違う所である。村山俊太郎、鈴木道太たちの東北の生活綴方実践者は「北方教育」を中心に結集する。そして東北地方という文化状況、つまり冷害による饑饉による子どもたちの生活の困窮という中で教師がどう行動したらよいか、とりわけ生活綴方教師の教育実践の向かう所は明白であろう。ちなみに、宮沢賢治の詩と

童話が世界的水準にまで到達しているのは、宗教即芸術、農業即芸術を超越しているからである。だから、現在の危機的状況が深まれば深まるほど賢治の作品は輝きを増すのである。そして、それは賢治が東北という土地にしがみつき、その中で農民を中核に据えた人間の生きる展望を死を堵して思索する土俗性を持っていたからである。現在、人間が生きる展望を持つためには、今の住んでいる自己のよって立つ所を掘り深める以外にないことを賢治の作品は示すのである。賢治の作品は、動物・鉱物・植物が共存し、互いに生かし合い、幸福を頒ち合う世界である。

以上の観点に立脚し、坂本の文集「ひなた」を中心とする実践は、賢治の持つ土俗性のように光り輝くのである。決して、中央の真似をすることなく、郷土性に即しつつ、子どもに即しつつ実践した所に坂本の特徴があると断じてよからう。

三、北海道綴方教育連盟のリーダーとして

坂本は『生活綴方と作文教育』（昭和二十七年六月一日発行 金子書房）の二八九～二九二ページに「北海道綴方教育連盟の活動——その意義と振幅について——」を執筆する。そして、北海道綴方教育連盟の結成について次のように述べる。

北海道綴方教育連盟の結成は、一九三五年（筆者注 昭和十年）八月のことである。東北地方の綴方教師たちの研究集団「北日本国語教育連盟」の結成は、鈴木道太君の『生活する教室』によれば、一九三四年十月のことであるから、これに遅れたこと約十ヵ月ということになる。

当時綴方教師による地域的な研究集団の結成は、ひとり東北地

方に限らず、まさに全国的な傾向といつてよいものであった。だが特に北海道綴方教育連盟の結成の気運を刺激したものに、何といても北海道に隣接する東北の教師たちの動きである。今正確な資料がないため、具体的な時期を明らかにすることができないが、山陰地方をはじめとして西南日本には、すでにいくつかの研究集団が存在した。しかしこれらの集団は、いわば個々の教師たちの交友機関のようなもので、集団そのものの研究方向が前面に押し出されての運動ではなかったか。これに対して東北の教師たちは「北方性」を中心のテーマとして、集団の主張が集約的に明らかにされていった。村山俊太郎・佐々木昂・鈴木道太・国分一太郎らの諸君を先頭にする一群は、千葉春雄の『教育・国語教育』小砂丘忠義の『綴方生活』百田宗治の『工程』などに、はなばなしい執筆活動を展開して、一種の壮観といえるものであった。

（中略）

北海道綴方教育連盟の結成に参加したものは二十余名であるが、逐年同人は増加した。最も多数の場合は六十余名に及んだ。

（以下略）

一九四〇年末から一九四一年初頭にかけ、生活綴方運動に対する治安維持法違反容疑による検挙が行われた。その事件に連座してから、坂本は教員には帰らず、国語教育の指導者でもあり、かつまた、北海道綴方教育連盟設立についても相談にあずかった石附忠平の北海教育評論社に入社することとなる。そして、その社の月刊誌「北海教育評論」に一九四九年（昭和三十六年）十二月号（第二巻 第四号）から一九五二年（昭和三十三年）五・六月合併号まで、合計十五回、足かけ四年間にわたって北海道綴方連盟の設立、活動、綴方連盟事件について詳細に述べる。

坂本は、北海道綴方教育連盟を創設するきっかけについて、千葉春雄編集の児童綴方作品雑誌の「綴方倶楽部」に掲載されていた函館常盤校 尋四 菅原奈々夫（指導者小笠原文治郎、後に連盟に加える。）の綴方であつたと述べる。その作文を次に紹介してみる。

ナット売り

お天気のよい、しばれる日でありました。学校から帰つて、にさんとおさらいをしていますと、お針をしていたおかあさんが「ナットやさん」とよびました。おかしいなと思つて、ふりかえつてみました。すると、おとなりの日さんにくる、松風町のナットやさんでした。おかあさんは、ナットやさんに

「今、家の人がいなくて、とてもこまるので、この子ふたりにナット売りをさせたいと思つて……」とねがっています。にさんとも顔をさげていました。ナットやさんは、「そうですか、それは気の毒だね」といつて、六十銭代ナットをおいてきました。

ナットやさんの出ていくのをまどから見えました。空の色が鉛色になつて雪がふりそうでした。おかあさんは、私たちのうしろにきていました。

「とうさんは、三月の末でなければ帰えらないし、かあさんところの子供たちを相手にしては、思うようにはかせげないので、ほんとうにすまないと思うが、ナット売りをして……たのむよ……」といつて、下をみて泣きました。にさんも泣いて、「いやだ、いやだ」といきました。ぼくも泣きたくなりましたが、「にさん、ナット売りだつて、ひとつの親孝行だよ」といつて、力をつけてやりました。

その晩、そこにはいつてから、にさんとふたりで顔を見あわせて

「にさん、父さんが帰るまでやろうさ」

「うんしんぼうしよう」

といいあいました。あすの朝からは、きつとでかけることにかたくきめました。なかなかねむれなかつた。風に小さいあられがまじつて、パチパチと音がしていました。

次の朝、はつと思つてとび起きました。時計は五時前でした。「きょうから、はじめる……」とにさんのひとりごとが聞こえました。おかあさんはもう起きて、ちやんとナットをつつんで下さいました。顔をふいて、にさんとふたりでげんかんに立つと、おかあさんが、

「すまないね」といつて下を見ていました。一ばん下のあかがその時泣きはじめました。

外はしばれていました。白い雪がうすくかかつて、にさんの足あとがくろくついていきました。ロシヤ領事館の赤いへいにも、雪がうすくついていました。ずつと下を下りていつて

「ナットー」とさけんでみました。どうしても声がでません。ポツポツ家々の戸があいてきました。にさんは、

「町はずかしいから埋立にいこう」といきましたので、涙の通りにいきました。「ナットー」と思いきりさけんでみましたが、小さい声でした。にさんもやつぱり小さい声でさげました。たびもはかないで、ナットのふろしきをしようたにさんを、よくよく見ることができました。ぼうしにあながありました。「ナットー」と大きい声がにさんの口からでました。「お前もいえよ」とにさんは笑つてくれました。「おうい、ナットや」と声が出ました。それは発動機船でした。「にさん」とさけんでふたりは走つていきました。「一本いくらだい」と船のおじさんが、とても大きい声

できました。

「五銭」と私がいうと、「そうか、四本の四・五の二十銭だ、おい、二十銭くれ」といつたので、にいさんのせなかから、四本出したりしました。二十銭お金をもらつた時は、うれいような気がしました。「おじさん、ありがとう」とれいをいつて帰ろうとすると、「おい、風を引くなよ」といつてくれました。

発動機船はポッポ・ポッポとあちらでも、こちらでも動いていました。白い雪をつんだままけむりをはいていました。ストーブのけむりもたくさん出はじめました。にいさんは一生けんめいさけんで歩きました。私はどうしてもはずかしくて大声がでません。人のすがたが見えると声がでないのです。さげぶ気になれば、新聞はいたつが出てきたりして、ととうとう、大きい声をださないうちに、ナットをみんな売つてしまいました。

帰りみち、「あいつら(友だちのこと)にみつければ、いやだから、姿見坂からいこう」とふたりで相談して家へきました。

おかあさんはよろこんでくれました。ごはんをたべていた時、発動機船で一番はじめに売つたことを、おかあさんに話しました。おかあさんはまた下を見て泣きました。私はおかあさんに泣かれるのが一番いやです。

以上がその全文である。坂本が、この綴方を読んでショックを受けたのは、ひとつには、生活と表現を切り結んで、作品としての説得力を持ちえていること、すなわち、子どもたちが綴方を書くという主体的営為は、すぐれて自分の生活している、そのことにかかわりながら、その生きていく場所を掘り深めていくこと以外にないことを実証する綴方であったこと。もう一方には、北海道性という生活台に立つ綴方表現になりえていること、そして、このことは、北

海道の文化に基盤を置いた綴方指導の可能性を発見したことによると言える。それと同時に北海道綴方教育連盟をつくる土壌が確かに存在していたことを先述の綴方から実感したのである。

坂本は、昭和十三年十月、三週間の予定で本州の実践者を訪問する。峯地光重、佐々木秀緒、国分一太郎、吉田瑞穂、菅忠道、波多野完治、坂本越郎、童話作家の川崎大治、木村不二男、戸塚廉、黒滝成至、城戸幡太郎、留岡清男、百田宗治、千葉春雄、西原慶一、滑川道夫、長谷健、菊地知男、今井誉次郎、平野婦美子、成田忠久等の綴方実践者、教育学者、国語教育実践者等に出会うことができた。そして、以上の人達から多くのものを学ぶ。

にもかかわらず、昭和十三年十月二十九日、釧路への帰途、旭川の小板佐久馬を訪問し、「内地府県の教育実践恐るに足らず、諸君よろしく心臓を強くして、大いにやるべし、やるべし」とまくしたて、その翌日、十月三十日に釧路に帰つたことを、昭和十三年十二月十八日発行の「同人通信12」に小坂は書いている。

だとすれば、坂本は、北海道綴方教育連盟は、「綴方生活台としての北海道性」を追求することであって、本州の研究団体の模倣ではなかったはずである。それまでに、東京や東北の綴方研究会にしばしば参加していた小鮎寛、横山真などが、地域に密着した独自の実践の境地を培っていたのは周知の事実であったし、広い北海道で、実践の交流をすることの必然性は当然あったはずである。「綴方生活」「工程」「教育・国語教育」等に北海道の綴方実践家の実践記録が見られることも、決して連盟結成の気運とは無関係ではなかったはずである。

先述の小笠原文次郎、旭川の小板佐久馬の賛同を得て一九三五年八月七日札幌の中心街にあった富貴堂書店に集合することになる。

発起人として、小笠原文治郎、小坂佐久馬、吉岡一郎、坂本亮の四人がなった。そして、当日集まったものの氏名は次の如くであった。

大酢栄一（根室）堀野年一（小樽）清藤重吉（上川）本保与吉（石狩）湯浅清（札幌）山田貞一（上川）小坂佐久馬（旭川）松木逸雄（釧路）矢野誠一（空知）土橋明次（上川）三木公（釧路）小笠原文次郎（函館）坂本亮（釧路）藤原行孝（渡島）吉岡一郎（札幌）若松溪吾（小樽）の合計十六名であった。

そして、道南小笠原、道西吉岡、道北小坂、道東坂本、網走地区小鮎の合計五名が事務同人となる。

また、連盟の事務所は、釧路市柏木町の坂本の自宅に置くことになる。連盟の機関誌として「綴方林」を発行することとなる。また、これとは別に「同人通信」を発行し、内部的な研究の交流、読書紹介、論争、教育実践日誌等、多彩な広がりを見せている。この『同人通信』は二十五号以上を発行している。

また、昭和十一年九月から、月刊『北海道文選』を発刊。毎号八ページ、発行部数二万部を数えていたという。一二年用・三四年用・五六年用・高等科用の四部だてで、飯田広太郎・桜井忠の監修、発行所は、札幌市南一条西一丁目の北海道教育評論社であった。

桜井忠も紹介しているように、『北海道文選』は、子どもの綴方への優秀なものを編集し、これに丁寧な指導と解説を附し、これを子どもに読ませて児童の綴方の力を啓発しようとするものであった。そして、そのすべての編集を北海道綴方教育連盟の人達が担当したのである。

そして、その冊子が二万部も道内で売れていたということは、北海道の綴方実践の底力があることを示す証拠となりえていたことは事実であろう。

「北海道教育評論」第十四卷七月号（昭和十三年六月二十八日発行）に、「児童文輪講」に第一回を掲載してから、一九四十年末から一九四一年初頭にかけて生活綴方運動に対する治容維持法違反容疑による検挙まで続けられた。担当者は、飯田広太郎、小笠原文次郎、小坂佐久馬、小鮎寛、坂本磯穂、桜井忠、中井貴代之、藤原行孝、吉岡一郎、以上九名が中心となっていた。そして第一回目は、坂本の担当した釧路市旭小学校 尋五の江端春子さんの「叱られて」という姉妹のけんかを中心にして書かれた生活文が批評の対象となっている。しかし、子どもがその綴方を書くきっかけ、書くことの意味づけ、その子の表現過程を動的に把握しない所での批評はむづかしい。ひとつの綴方を批評することは、その表現技術のみを問題することなく、その綴方を書いた人間、すなわちその子の生命・生活の問題にしなければならない。

したがって、子どもの綴方を批評することは、その子の生活への対し方を問題にしつつ、あわせて文章表現にどう結実化したかが問題となる。その上に、その綴方がその子の成長にとってどのような筋道に立つのが問題となるのである。

にもかかわらず、その子の実態がわからなくて、文章のみを批評すること自体が無理となる。だからこそ、批評がむづかしすぎるとか、抽象的すぎるとか、さらに、また、その綴方を冷たく見すぎているといった同人からの批判が出るのは当然であろう。しかし、北海道教育評論社から「児童文輪講」に執筆を依頼された所に綴方教育連盟の同人の実力が認められたことのあかしでもあろう。

北海道綴方教育連盟結成の翌年一九三六年八月九日、十日、十一日の三日間、札幌第一中学校講堂で七百名の参加をえて講習会が開催される。この時、国分一太郎（山形）、池田和夫（新潟）、水野静

夫（東京）の三氏と東京児童の村小学校主事の野村芳兵衛の講演があった。演題は「綴方教育の今日的指標と実際の設営」であり、三日間毎日、午前中に野村の講演はあった。

それと同時に、全国文集展・全国綴方同人誌展が開催された。道内からは中井貴代之が「環境に生きる方法としての綴方」、小鮎寛は「綴方の大衆化の問題」、横山真が「生活真実とその抵抗面」、藤原行孝が「子どもと文集」の発表をする。野村芳兵衛と一緒に来道した戸塚廉は、八月十一日、「農村の文化運動の経験から、今の綴方人に対する疑問を語った。」という。

とりわけ注目すべきことは、十日の午後の発表会前に控室で松永建哉が行った教育紙芝居であった。最終日の十一日には、松永の紙芝居の本が売り切れて、注文が続出したとのことである。そして、その結果、北海道の綴方実践人が教育に積極的に紙芝居を取り入れることとなる。しかし、綴方道盟事件では、この紙芝居が問題となる。「ジャンバルジャン」（ピクトル・ユーゴー）「フタツノランドセル」（榎本楠郎）「黒い樵と白い樵」（浜田広介）などの作品が、貧乏を扱っているから、盗みをしているから、「金時計」（パンテレーエフ）の作品は、ロシアの作品だから、だから赤化思想を子どもに植えつけるものであるということになる。絵のうまい先生が絵を描き、それに綴方の先生が文を書くということをしていくのである。それは一途に子どもを思うが故である。

坂本を中心とする北海道綴方教育連盟の実践は、「綴方生活台としての北海道性」の追求であった。そして次に述べる七項目が綴方連盟の指針として定められる。

- (1) 開拓の政治機構と道民の生活機構との緊密性
- (2) 道民としての生活の伝統が浅い。

(3) 文化に対して吸収性と弾力性に富む。

(4) 文化の移行性と浸潤性

(5) 地域的懸隔性とその生活特性

(6) 生産機構の特殊性

(7) 自然環境の特殊相

以上の七つの観点を持ち得たことは、北海道の教育、とりわけ綴方実践の基盤を支えるものとして緊要な課題となる。つまり、本州方面からの一般旅行者によって語られる印象は、自然の眺望が雄大であるとか、白樺の疎林が美しい、鈴蘭の花が可憐である、ポプラ並木が美しい等、北海道について以上の牧歌的な讃辞ばかりではない。それどころか、荒々しい自然が人や人を屈伏させているという感が少なくない。貧弱な家屋が雄大な山野を背景に、悄然としている。鉄道沿線の眺め、風雪にさらされている海岸の漁家のわびしさと坂本が述懐するように、以上のような自然的環境と人間の交渉のなかで、北海道の道民性がつくられることは文化論から言っても当然である。

したがって、一年の半分は冬の厳しさに閉ざされている北海道の間、とりわけ北海道の子どもたちは、この厳しさに耐えることの生活を強いられる。だからこそ、北海道の人間は寡黙にならざるをえないのである。ひたすら、自然と闘うことを通して、その人間性はつくられるのである。つまり、北海道という生活空間を正確に認識しつつも、それを克服する地点に子どもたちを立たせようとする拠点を持ったことは喫緊なことと評価したい。いや、それよりも、北海道の教育が、そのよって立つ立場を獲得したことを意味する。「生活学校」第二巻十月号（昭和十一年十月一日発行）に戸塚廉が「北海道の教育とその人々——北海道東北訪問記——」のなかで、「綴方

の同人たちの中心問題が、綴方を越えて全生活教育の問題に向つているところが、この連盟の今後の正しい動きを暗示しているものと言えよう。」と評価しつつも、八月八日の日記には次のような北海道の印象を書きつける。「広大な原野ポプラの並木に一目でそれとわかる北海道の大自然の中に、これまた移住民の住家の何とゆう小さいことか。人の住居とわどうしても思われぬ小屋、木おシバリつけ枝切れが葎おしつけて只雨おしのぐだけのひどい家のはるか隔てて三軒五軒とある。これらの家の子供達おまとめる学校の仕事の想像も及ばぬ困難さお思ひ、ここの子供が一生の間に触れ合ふ文化の量とか、社会生活の総和とゆうものが日本の平均量に比べて如何に大きな開きがあるかなど考えてゆく。」

以上の戸塚のことばからもわかるように、東京の文化と北海道の文化を比較して、北海道の文化の劣っている所を如何に指摘しても、北海道の文化を向上させることにはつながらぬ。

したがって北海道の文化をになつていくのは、この北海道に根をおろし、その視点からの文化建設を考えることである。それゆゑ、坂本が主張する「綴方生活台としての北海道性」ということは正しいことであるし、それを掘り進めることなしに北海道の綴方教師の生きていく道はなかつたと把握できる。

さて、昭和十一年と、その翌年の十二年にかけて、千葉春雄、百田宗治、波多野完治、峯地光重などが続々来道する。そして、このことが、北海道の国語教育、とりわけ綴方実践家に刺激を与える。中央からやって来る人たちは、決して観光だけにやってくるではない。それどころか、北海道の教育実践の豊かさに着目し始めたからである。峰地は坂本の文集「ひなた」に、波多野は、小鮎の生活教育を高く評価する。北海道の教育実践は、小手先のごまかしがなく、

骨太で、ダイナミックであつたが故に、全国の実践者の目にとまり、かつ教育学者の目にとまつたのである。

筆者は、多くの北海道の綴方実践者が『綴方生活』『工程』『教育・国語教育』『生活学校』に執筆しているからといって評価するのではない。それよりも、真摯にかつ情熱的に実践せざるを得なかつた状況をこそ問題にしたかつたのである。だからこそ、多くの実践者が全国的な雑誌に、自己の綴方実践を執筆したのである。その結果、自分たちの実践の確かさ、ゆるぎない理論に支えられていることに自信を持ったが故に尊いのである、と断じたい。

四 道内に於ける坂本の教育実践を中心に

北海道綴方教育連盟結成の一九三五年の十月 旭川師範学校附属小学校の「生活教育研究会」に坂本は発表する。その発表題目は「学級経営の実践工程——生活組織を指標とする一教室の臨床的報告——」であつた。それと同時に、文集「ひなた」、子どもの読み物「ひなた叢書」、郷土研究「遊具の研究」、「壁新聞」等、子どもの文化的活動の成果を持参して、廊下に掲示・陳列したという。実践報告書は、活版で千部用意したという。そして、その内容も、子どもたち自らのつくる文集を中心に、子どもたちが自らの生活に気づき、自らの学級文化を創造する過程が克明に書かれている。だからといって、決して学級内に閉鎖的にとじこめることなく、地域社会をも包含する中広い実践活動となつていた。僅か二十七頁の研究物ではあるが、坂本の教育実践の原点を示すものとして貴重である。そして、ここでの実践が以後の実践記録、論文の骨子となつていくと

断じてよいのではないか。

さらに、昭和十三年十月六・七日の両日、札幌師範学校附属小学校を会場に「三師範附属連合研究会」が六百名の参加をえて開催される。三師範附属とは、札幌師範学校附属小学校、函館師範学校附属小学校、旭川師範学校附属小学校、以上三師範の附属小学校の連合研究会のことである。その第一回目が道庁の肝入りで開催されたのである。そのために、大きな反響をよんだ。研究教科は、読方科、算術科、理科の三教科、発表をする正会員三十名、質疑のできる普通会員百名、その他参観人三百名から四百人であったという。当時、北海道の国語教育の指導的立場にあった、小樽緑小学校長の沖垣寛は「読方の教壇―読方教育と人物形成―」、札幌北九条小学校長の桜井忠は「読方指導の実践的形態」、札幌中央創成小学校長の飯田広太郎は「読方実践の具体相」という発表を行っている。十月六日、尋四の「呉鳳」の特設授業をした札幌師範学校附属小学校の齋藤七郎治も、十月七日、「読方に於ける教科性の充足」という発表をする。本名坂本亀松（釧路東栄小学校）は第一日目の十月六日に「読方の学年的展開トソノ訓練」という発表をしている。

以上二つのことから、坂本が北海道国語教育界を代表する若手の国語教育実践者、とりわけ綴方実践を中核にした地位を獲得したことを意味する。

とりわけ、文集「ひなた」を中心とする綴方実践、つまり、子どもの文化活動の組織者としての坂本の評価は北海道はもとより、全国の綴方実践者からも高い評価をえることとなる。

昭和九年八月一日発行 「綴方教育」 八月特輯号 「綴方教授細目の新建設」に坂本は、「作品中心の教授細目」を十頁にわたって書く。その項目は次のようになっていいる。

一、教授細目の本質

二、所謂客観性と主観性

三、綴り方の指導基準

四、細目作製の二方途

五、細目には必ず実際の作品を

六、児童文は最も佳き指導標準

七、郷土的なるもの

八、学年的指導標準を

九、細目実践例について

以上の項目からもわかるように、坂本は「……常に児童文そのものを中心に置かなければならない。記述させる準備的な指導がどんなに綿密に書かれていても、文話が頗る巧妙に工作されていても、乃至は推敲批評の方案が極めて具体的に示されていても、そこにその指導の標準を何よりも具体的に実在させる作品がないといふことは、まことに賛成し難いことである。」として、標準となる児童作品がない所では、指導が存在しないというのである。絶えず、児童を中心に於て教育を考える坂本らしいところである。そうやってくと、教師の文章に対する見識がないとどうにもならない。そこで、坂本も、その書物として、田中豊太郎の『綴方指導系統案と其実践』（賢文館 昭和七年）、菊地知勇の『児童文章学』（文録社 昭和八年）、千葉春雄の『児童文の批評と鑑賞と文語と観方の研究』（南光社 昭和七年）をあげ、文章に対する見識を培ったという。

昭和十二年、雑誌『教育』の十月号に 留岡清男は「酪連と酪農義塾―北海道教育巡礼記―」という文章を書く。その中に、坂本ら生活綴方の実践を批判して次のように述べる。

……今夏札幌第一中学校に於て開催された北海道綴方教育連盟の

座談会に出席したことである。同連盟の人々は、生活主義の教育を標榜し、これを綴方によって果させようとしてゐる。少くとも綴方科によってそれが一番自由に果され得ると信じてゐる。座談会では、綴方による生活指導の可能性が強調されたが、理屈を言へば、何も綴方科ばかりでない、どんな教科だつて生活指導が出来ない筈はなく、またそれを当然なすべきであらう。然し、問題は綴方による生活指導を強調する論者が、一体生活指導を實際にどんな風に実施してゐるか、そしてどんな効果をあげてゐるか、といふことが問はれるのである。強調論者の実施の方法をきいてみると、児童に實際の記録を書かせ、偽らざる生活の感想を書かせる、すると、なかなか佳い作品が出来る、之を讀できかせると、生徒同志が又感銘を受ける、といふのである。私はいづれそれ位のことだらうと予想してゐたから、別に驚きもしなかつたが、そんな生活主義の教育は、教育社会でこそ通ずるかも知れないが、恐らく教育社会以外の如何なる社会に於ても絶対に通ずることはないだらうし、それどころか、却つて徒らに輕蔑の対象とされるに過ぎないだらう。このやうな生活主義の綴方教育は、畢竟、綴方教師の鑑賞に始まって感傷に終るに過ぎないといふ以外に、最早何も言ふべきことはないのである。(六十ページ)

以上、留岡は、綴方教育者を痛烈に批判する。とりわけ北海道綴方教育連盟の人たちが生活教育ということを強調するが故に留岡は批判するのである。

そして、留岡は、最少限度に保障されざる生活に標準を合わせ、その結果、最少限度にしか保障されない大衆生活の種々なる原因が探索されるとする。生活主義の教育は、そこに於いて、科学性と大衆性の基礎が与えられる。そして、このような発見は、發展形態と

して協同組合の發生と發展とに接続すると提言する。以下具体的に北海道の酪農義塾のあり方を問題にする。

確かに留岡の北海道綴方教育連盟に対する批判は正しい。もしやうだとしても、教育という実践営為、とりわけ綴方教育で留岡のいふことを実践することは不可能に近い。労働にかかわり、生産にかかわり、生産のメカニズムを社会科学的な認識によつてわかるといふことが、果して子どもに可能であらうか。

坂本も昭和十三年「生活学校」一月号に「生活教育獲得の拠点」といふ留岡への反論を書く。

現在生活教育の主張に聞くべきことが多いが、同時に現実の小学校の教育―制度化され因襲的といへばいい小学校の教育実状の中にある教師としては、どうにも手のさし伸べやうのないやうな言説も多い。生活教育が飛躍的な言説にならず、小学校の現行の諸教科の中に、その実践的方向を示すようにならなければ、いつまでもそれは主張者の犬糞的興奮に終る場合が多いだらう。

(四十ページ)

以上の坂本の反論は、留岡の論とはかみ合つてはいない。それどころか、「小学校の教師というものは改革的立場からいつて弱いものだ」と強調する。坂本は、教育の限界のなかで、いかに、人間らしい生活を子どもたちにどう保障したらよいかに苦悩するのである。

同じ「生活学校」で、山田清人(東京・毛利小)も「綴方教育を素直に見直せ」と留岡に反論する。そして、「生活主義教育原理の一つの發展として『協同組合』の実践形態を、留岡氏が考えるからと言つて、綴方教育の特殊性を素直に認識もせず、徒らに論難に先ばしすることは、実践を遊離した批評家の公式主義以外の何ものでもないのである。」(六十五ページ)

筆者が、ここで指摘したいのは、教育学者と実践者が一体となつて教育実践の成果をあげることは、現在なお数少ないということである。だから、留岡の主張する生活主義に基盤を据えた教育実践が、もしかりに北海道で行われているとすれば、北海道綴方教育連盟事件も、もっと悲惨になっていたであろうことは予想に難くないであろう。

一九五七年（昭和二十二年）の『北海教育評論』 五月号、七月号、九月号の三回にわけて、「課題と自由題」という論文を執筆する。その項目を挙げると次のようになる。

一、この問題を問題とする意味について
二、芦田恵之助の「随意選題」の提唱 (一)

以上五月号

三、芦田恵之助の「随意選題」の提唱 (二)
四、いわゆる「小倉論争」について

以上七月号

五、自由題の方法から課題方法へ
六、作文教育の課題主義について

以上九月号

坂本の主張は、教育の系統性を考えると、子どもに課題を与え、表現までの生活構成を考えることが緊要だととらえる。また、継続的観察とか、集団でひとつの作文を書くといったことも大切となるとする。つまり子どもたちの生活経験につき当たらせるためには、教師がその一人ひとりの子どもをよく知っていて、その子どもにも適した課題が考えられてしかるべきだとする。さらに、「文題材培育」にして、課題に対する子どもたちの抵抗をどのように回避し、表現までに題材を消化し、成熟させるかの方法である、と断るのである。

したがって、子どもが自己と生活の状況との緊張関係を創出しつつ、それを課題という媒介によって綴方としての表現力にまで高めるといふ方向をとらせるといふのである。すなわち、表現と生活指導との止揚統一を課題という方法によって完成したのである。そして、それは、友納友次郎の唱える練習目的ではなく、生活という事実のなかで子どもは表現技術も生活もきたえられるということを見したのである。そして、そこにこそ子ども一人ひとりを育てる教師がいる意味があるという。

たとえば取材範囲の狭い子どもには、主題を設定して「困ったこと」「うれしかったこと」「悲しかったこと」と子どもの心根をゆさぶって書かせることがよいとするのである。

そして、そのためには、教師は、子どもの伸び・育っていく節目を正確に把握し、その子の成長に働きかけるものとして作文を位置づけるという立場をとる。

ところで、坂本の綴方教育の完成を示す書として一九五四年（昭和二十九年）十月十日発行『北海教育評論』（第七巻 第九号）増刊「作文教育二十話」をあげることができる。その目次は次のようになっている。

理論篇

- 第一話 子どもを理解する
- 第二話 生活の技術をつける
- 第三話 生活勉強と生活反省
- 第四話 作品を早く読むこと
- 第五話 よい教室づくりのため I
- 第六話 よい教室づくりのため II
- 第七話 よい教室づくりのため III

第八話 よい教室づくりのため IV

第九話 よい教室づくりのため V

第十話 友を求め 友を拡げる

指導篇

第十一話 現実の文

第十二話 どのような現実

第十三話 くわしく書かせる

第十四話 課題と自由題

第十五話 ねうちのある題材

第十六話 文のねらいと文の組立

第十七話 計画のある表現

第十八話 詩の指導もしよう

第十九話 さまざまな表現様式

第二十話 文集を作ろう

以上の目次からもわかるように、上述の雑誌は、作文の入門書として作られたものである。したがって、作文教育の基礎的なもの、子ども理解、よい教室づくりということに中心が置かれている。だからといって、決して易しさに妥協はしていない。

ここでは、ねうちのある題材について解説している所について述べよう。坂本は、I 社会性のある題材 II 児童性のある題材 III 地域的な題材 IV 消費的な題材より生産的な題材 V 意欲的な題材 VI 個人的な題材より集団的題材 VII 愛情の含まれる題材 VIII 感性的な題材よりも観察的な題材

以上の項目でもわかるように、坂本は子どもたちが生活をどう過ごすか、という所から表現指導が始まるととらえる。つまり、生活を意識的に認識し、それを自分の生きるといふ精神のフィルターを通して自己を省察する。その一連の人間の成長過程に綴方を位置づ

けるのである。だからこそ、綴方を書くという営為と生活するという営為が統一的に把握されるのである。坂本の綴方教育理論が北海道性を豊かに持ちつつも、全国的にも卓越した理論になりえているのはここにある。

五、おわりに

坂本は釧路市で、殆んどの教員生活を過ごした。それでいて、地域だけに埋没しないで、自分の実践を深めることを通してのみ、全国の綴方実践者とながっていった。と同時に、北海道の綴方実践界をリードしつづけた。したがって、ひたすらに綴る力を全員の子どもにつけることに一生懸命であった。つまり子どもの書いた綴方でもって、自己の作文実践を語るところに坂本の真骨頂がある。だからこそ、文集「ひなた」の実践が坂本の出発点であるとともに、終着点であると把握してよいのではなからうか。

現在もなおおかつ、「エンピツをにぎる母親の会」をつくったり、母親の読書の会を作って、毎日のように忙しく走りまわっているという。これらのことも、すべて、かつての文集、つまり児童文化活動の延長線上に位置づけられるだろう。

〈注〉

- (1) 雑誌「工程」昭和十一年七月一日発行の文集「ひなた」の紹介で百田宗治が書いたもの。
- (2) 「学級文化の昂揚」二五頁 「教育・国語」昭和十四年十二月
- (3) 「生活学校の諸問題——文集に就いて——」一九頁 「生活学校」第二卷 三月号 昭和十一年三月
- (4) 城戸幡太郎、留岡清男が中心となり、岩波書店の「教育」を中心に活躍した。両氏とも、後に北海道大学に赴任している。
- (5) 「北方教育」は、昭和五年二月、秋田で成田忠久が中心となって創刊となる。北方教育としての理論と実践に沈潜して多くの成果をあげた。

(旭川分校 本学教授)